

講演会 & ライブ な日々 ⑬

古川 秀明

歌声喫茶

歌声喫茶とは、コーヒー、ジュースなど飲料を供し、アコーディオン、ピアノなどの生(なま)伴奏によって、司会者（うたごえリーダー）のリードで参加者が、歌集をもってともに歌を歌い合う場所。

「うたごえ喫茶」と表記されることも多い。



1954年（昭和29）、東京都新宿区歌舞伎(かぶき)町の食堂で、店内にかかっていたロシア民謡のレコードにあわせて客が歌い始めたことにヒントを得て、柴田伸(しばたしん)が「歌声喫茶」灯(ともしび)を始め、50年代後半から全国に広がった。

ただし、歌声喫茶という呼び方は当初なく、いつしか総称して歌声喫茶とよばれるようになった。灯、カチューシャ、どん底（以上東京都・新宿）、牧場(まきば)（東京都・渋谷）、灯（東京都・吉祥寺）、エルサルバドル（川崎市）、炎(ほのお)（京都市）、こだま（大阪市）などが有名であった。

1960 年ころには『北上夜曲(きたかみやきょく)』『忘れな草をあなたに』『北帰行(ほっきこう)』などが歌声喫茶で歌われることによってヒット曲になり、また『カチューシャ』『灯』『トロイカ』など数多くのロシア民謡が歌声喫茶を通して広まった。

第二次世界大戦後の復興の息吹、新しい時代への希望、労働運動、安保闘争などを背景として生まれた歌の数々、うたごえリーダーたちによって紹介された、世界の歌の数々が歌声喫茶では歌われた。集団就職などで都会に出てきた若者たちの孤独をいやす場ともなった。

しかし、1960 年代のなかばころから客数が減少。安保闘争の挫折(ざせつ)、趣味の多様化、テレビの普及などが諸要因といわれ、歌声喫茶は次々と閉店し、70 年代のカラオケの出現の後、80 年代は、ともしび（新宿、吉祥寺、東京都・亀戸、長野市、大阪市など）、どん底、家路(いえじ)（新宿）、バラライカ（仙台市）などが営業するのみとなった。

1990 年代なかばころから、ともしびによる出前歌声喫茶（うたごえリーダーと伴奏者を派遣し、喫茶店や公民館、ホールなどを会場とする）が盛んに行われるようになり（全国的に年間 200 日ほど）、また、地域での一日歌声喫茶や定期的な開催される歌声喫茶が急速に増えた。関東地域だけでも 100 か所近くが定期的な開催されている。

「個」の文化が浸透し、バーチャルな世界が広がる一方で、人間同士の生(なま)のふれあい、ともに生きることを望む心もまた人々の間に広がっており、こうした動きが文化としての歌声喫茶の再評価につながっている。

2006 年（平成 18）現在、ともしび、家路（新宿）、バラライカ（仙台市）、ゴリ（千葉県船橋市）、ふる里（東京都・八王子）、カンターレ（福岡市）が常設の歌声喫茶として営業中。週末などに「うたごえ」を行う店は全国的に増えている。

このように歌声喫茶は静かに生き続けている。

実際に歌声喫茶に出向き、自分も参加してみた。

そんなに広くない喫茶店に、お客さんが満員だ。

20人くらいはおられた。

年齢層はだいたい60代～70代。

主催者さんによると、80代後半になるとさすがに出歩くのはきついみたいだ。

そういう場合はこちらから出向くそうだ。

この日の参加者の7割は女性。

やはり男女比でいうと、女性の参加者の方が多い。

女性の方が積極的に外に出て、いろんな人とコミュニケーションを取る能力に長けている証でもある。

どうしてもじいさんは家に引きこもりがちになる。

「俺は定年まで会社の重役を務めてきたんだ。なんで今さらわけのわからない連中と一緒に歌など歌わなければならないんだ」

ま、私も男性なのでわからんでもないですが、あつという間に家の中で厄介者にされる可能性があるなあ。

それに引き換えおばあさん（失礼しました。淑女の皆様）のお元気なことお元気なこと。

次々にリクエストされて行く。

参加者の歌はなかなか凄い。

歌声喫茶は歌の上手下手を競うところではない。

みんなが一緒に大きな声を出して歌う。



ただ楽しく歌えばいいのだが、この日参加されていた淑女のみなさまはなんとハモっておられた。

ハモるというのは、ひとつの歌を低音、中音、高音、とパートに分けて歌うこと。

かなり音程が問われるし、練習も必要だ。

う～ん、おじいさんの声がほとんど聴こえないぞ・・・。

歌の好きな人は多い。

で、その人達が歌を歌うのに一番お手軽なのはカラオケだろう。

日本で生まれたカラオケは今や世界中を圧巻している。

外国に行っても「KARAOKE」といえば通じるらしい。

若者達のカラオケ人気は根強い。

最近はさらにボーカロイドというのもある。

通称「ボカロ」。

ボーカロイドというのは楽器メーカーのヤマハが開発した音声合成技術。

メロディーと歌詞を入力してキャラクターに歌わせる音楽ソフトのことをいう。

代表的なキャラクターは初音ミク。

もちろん初音ミクという実在の人物はいない。

バーチャルな架空の歌手。

このミクちゃんに歌わせる歌を作って配信する。

それを若者がニコニコ動画などで検索し、気に入った曲があればカラオケで歌い、その動画をまた配信する。

と、いくら文章で書いてもいまいちわからないのだが、ボーカロイドは今まさに若者に大流行の最先端音楽だ。

若者達のカラオケでは、いかに自分の歌を機会の初音ミクの歌に近づけるかで必死みたいだ。

う～ん、人間が機会の声を真似しようとしているのか・・・。

私のように貧しき昭和時代の人間は、ボカロではなくフォークギターだった。指に豆を作りながら、吉田拓郎やフォーククルセダーズなどの歌を、平凡や明星の付録で付いていた歌本のコード表をみながら必死でコピーしたものだ。

ギターの弾き語りができるようになったら、誰かの部屋や公園なんか集まって歌を聞いてもらう。

ここらあたりで歌声喫茶との差はあったのかもしれない。

歌声喫茶はみんなで歌うのが魅力なのだが、我々フォーク世代は自分で歌ってそれをみんなに聞いてもらうというスタイルだった。

今のライブやコンサートだって、基本的にはそのスタイルだ。

歌手がいて、観客がいる。

そして、歌手はスーパースターだったのだ。

吉田拓郎も矢沢永吉も間違いなくスーパースターだった。

みんなそのスターに憧れ、必死で真似をした。

しかし、ボーカロイドでは「初音ミク」という実在しないキャラクターが歌い、

みんなが熱狂している。
映像もあるのだが、なんと初音ミクがコンサートを開催し、それにみんなが熱狂する。
初音ミクは機会だから音程は絶対はずれないし、歌い方も完璧だ。
生のアイドルみたいに年齢とともに色あせないし、週刊誌にプライベートを暴かれることもない。
売れなくなったらヘアヌードになって、昔のファンを悲しませることもない。

つまり、初音ミクは生の人間ではないので、経年劣化はないし、いつまでも理想のキャラクターでいてくれる。
実際に恋人は作らずに、アニメや人形などのバーチャルで二次元のキャラクターに恋している若者達が激増している。
生身の恋人だと楽しいこともあるが、ややこしいことも満載だ。
初音ミクは決して裏切ったり傷つけたりしない。
良いか悪いかではなく、これが今の若者の現状なのだ。

若者達はボカロにはまるのだが、高齢者は再び歌声喫茶に戻っている。

ボカロを観た高齢者はわけがわからないかもしれないし、歌声喫茶を観た若者達もわけがわからないかもしれない。
ボカロにも歌声喫茶にも入れてもらえない私の「ぶんぶんばあさんの歌」はどこに行けばいいのだろう……。

さて私がこのボカロで曲を作ろうと思ったらどうなるか……。
ひたすらコンピューターと向き合わなければならない。
一音ずつ音符を打ち込み、音の長さ、高さ、ビブラート、強弱などをコツコツと打ち込んで行く。
地道で根気が必要な作業。
正直言って私には無理。
昔YMOなどのテクノポップが大流行、その流れで小室哲也がシンセサイザーによるコンピューター音楽を大ブレイクさせた。
その頃も今もひたすらギターアナログな私は、まったく興味がわかなかった。
このコンピューターやシンセサイザーの音楽を強力にプロデュースしたのはヤマハだ。
常に新しい音楽の波を生みだし、若者に提供し、収益を上げる。

営業戦略としては秀逸だ。

みんなが歌うという行為の一番最初は、狩猟採集生活をしていた太古の洞窟の中で、夜に火を囲み、肉食獣の攻撃を避けながら収穫の喜びを手拍子で歌ったのが始まりなのだろうか・・・。

いやいや、どうやらそうではなさそうだ。

歌には人類生存の大きな意味がある。

洞窟の中から時は流れ、歌声喫茶があり、流しの演歌があり、ギターやピアノが普及し、カラオケに進化し、コンピューター、シンセサイザー、そしてボカロに発展している。

太古の昔から形を変えながら、人はずっと歌を歌い続けている。

会話することと同様に、人は歌わずにはいられない生き者のようだ。

歌声喫茶で歌う人も、自分で弾き語りする人も、カラオケで歌う人も、ボカロで歌う人も、形や方法が違うだけで、「歌う」、そしてそれを「誰かと共有する」ということは共通している。

どうやらそこには娯楽的要素以上の物があるように思われる。

2018年11月

京都市内にあるカフェで歌声喫茶を再現します。

興味のある方やリクエストのある方は是非お越し下さい。

お問い合わせは私のHP「tantant.net」まで。

シンガーソングカウンセラー
ふるかわひであき